

「北アフリカ派」試論

——被植民者のドラマ——

島田尚一

たえず人間を語ってやまなかつたヨーロッパ、たえず人間に心をつかうと公言してやまなかつたヨーロッパ——その精神の獲得した勝利のひとつひとつに、人類はどれほどの苦悩を支払ってきたか、今日われわれはそのことを知っている。——フランツ・ファノン

はじめに

第三世界の台頭という歴史の大きなうねりのなかで、一九五四年から一九六二年にかけてアルジェリア人民が熾烈な民族解放闘争をたたかい、ついに祖国の独立をかちとつたことは、まだわれわれの記憶にあたらしいが、このアルジェリア戦争には、いまひとつ文学的副産物があつた。詩の領域におけるジェバル (Assia Djebar)、『ハダッド (Malek Haddad)』、『クレア (Henri Kréa)』、小説の領域におけるクライド (Driss Chraïbi)、『ディブ (Mohammed Dib)』、『フェラウン (Mouloud Feraoun)』、『マンメリ (Mouloud Mammeri)』、『メンシ (Albert Memmi)』、『セフリウイ

(Ahmed Sefrioui)、『ヤシーヌ (Kateb Yacine)』、『マグレブ土着のフランス語作家の輩出がそれである。

このいわゆる「北アフリカ派」(école d'Afrique du Nord) が現代フランス文学のなかに、ささやかながらひとつの場所を占めたのは、カミュと同じくアルジェリア出身のフランス人作家、エマニュエル・ロブレスの努力によるところが大きい。北アフリカ・ペンクラブの会長をしていたロブレスは、Seuil社から『地中海叢書』(collection «Méditerranée») を刊行、これらの作家をあいっいで世に送ったのであった。

フランス文学と北アフリカの関係は、なにもカミュをもってはじまるわけではない。古くは『サランポー』のフローベールや『サハラの夏』のフロマンタンから、『地の糧』『背徳者』のジッドや『砂のばら』のモンテルランまで、北アフリカに題材をもとめた作家は少なくない。しかし、そのとりあげ方はさまざまであっても、共通していえることは、彼らにとって北アフリカが要するにエグゾチスムの対象、せいぜいのところ逃避の地でしかなかったということであろう。

これら本国人作家のあとに、カミュ、ロブレス、ジュール・ロワなど「北アフリカのフランス人」、つまり植民者作家の世代がつづく。たとえば、アルジェリアの太陽や海をぬきにしてカミュの文学を語ることができないように、彼らにとって北アフリカは、もはやたんなる文学的アクセサリーではない。しかし、いかに彼らの文学に北アフリカの刻印が深いとはいえ、彼らの文学的野心があくまで本国の文学を志向していたことには変わりない。彼らにとって北アフリカは、しよせん第二の祖国以外のものではなかったのである。この点で、アルベール・メンミのつぎのようなカミュ評は興味ぶかい。——「私はこのようなペースペクティヴにおいて、カミュのすべてを解釈しなおすことができると思う。『異邦人』はたんに形而上学的な物語、実存的苦悩の記録であるばかりではない。それはまた、自分の故国における異邦人カミュ (Camus-étranger) であるのだ。『誤解』は、「……」こういう社会的・歴史的な誤

解の表現にほかならない。さらに、あれほど不統一にみえたこの大作家の政治的態度も、こうして説明できる。⁽²⁾

マグレブ独立の前夜に生まれた「一九五二年の世代」⁽¹⁾「北アフリカ派」は、被植民者の文学グループである点で、前二者とは本質的に異質である。北アフリカの植民地世界は、ここにはじめてその正当な表現者を得ることになったといえよう。

もつとも「北アフリカ派」は、共通の文学理念に発するいわゆる文学運動ではない。その共通項はマグレブ土着のフランス語作家という一点にとどまるから、たとえばセフリウイやフェラウンのような素朴リアリズムの作品から、一種サンボリックなカテブ・ヤシーヌの『ネジュマ』のような作品まで、その内容は多種多様であり、また文学的な質からいっても、正直なところ玉石混交の感はぬぐえない。本稿では、そうした「北アフリカ派」の全容を鳥瞰することは避け、いくつかの代表作、それも主として小説作品をめぐって、被植民者の内的ドラマとでもいうべきものをさぐってみたい。

- (1) たむえむらう Maurice Nadeau: *Le roman français après la guerre* (Gallimard, 1963), pp. 133-134 & Pierre de Boisdefffre: *Une histoire vivante de la littérature d'aujourd'hui* (Librairie Académique Perrin, 1964), pp. 472-474 を参照。

- (2) *Anthologie des écrivains maghrébins d'expression française* (Présence africaine, 1965) の序文、一四ページ。

1 「言語のドラマ」

「北アフリカ派」の文学について語るとき、まず問題となるのはそのフランス語使用であろう。サンゴールやエメ・セゼールら、一九三〇年代の「ネグリチュード」運動の黒いオルフェたちの場合もそうであったが、「北アフリカ

派」の作家たちは、被植民者としての疎外と苦悩を語り、その原因である植民地主義を告発し、さらにすすんで民族の解放を呼びかけるのに、なぜ民族の言語ではなく植民者の言語を使用するのであろうか。

尾崎秀樹氏は、旧日本植民地の文学について語りながら、「台湾にしても朝鮮にしてもその被圧迫民族の文学のなかに、植民地支配に対する抵抗と屈従のすがたが盛りこまれている。しかもそれを自らの言葉ではなく支配国の言語によってしか表現しえなかった——あるいはそのようにしむけられたことのなかに、植民地文学の重大な問題がはらまれている⁽¹⁾」と書いているが、このことは「北アフリカ派」についてもそのままではまるだろう。いや、植民地支配の時期の長さからして、こちらのほうが事態はるかに深刻だったといえるかもしれない。それではいったい北アフリカの被植民者はいかなる言語状況におかれていたのであろうか。マグレブ三国中、あらゆる点で植民地的抑圧がもっとも苛酷だったといわれるアルジェリアについて、この点をながめてみよう。

(1) 尾崎秀樹『旧植民地文学の研究』（勁草書房）、二四〇ページ。

フランスのアルジェリア経営がはじまった一八三〇年以來、ここでは書き言葉としてのアラビア語 (Tugha) の使用が禁止された。他のアラブ諸国に例をみないこの母国語収奪の結果、それまでは読み書きのできたアルジェリア人が、一九六二年の独立まえには八五パーセントちかくという驚くべき文盲率をしめすにいたる⁽¹⁾。

もっとも、公式には禁止されたとはいえ、この古典的アラビア語の教育は、その後も農村の小学校や、わずかにのこったザウイア (zaouia) と呼ばれる回教寺院などで、ほそぼそながらつづけられ、その教育水準も、かならずしも低下したわけではなかった。この言語の決定的な後退は、話し言葉とかけはなれた古典語を、『コーラン』の暗唱という旧態依然たる方法で教えたという事実よりも、むしろ植民地化によってもたらされた社会の変化、征服者の意図

に反して生じた、知識層の近代生活へのめざめに起因するものであった。征服者の抑圧に抗してたたかう民族主義者でさえ、いやむしろ彼らこそ、たたかいを有効にすすめるためにフランス語の使用を必要としたのである。⁽²⁾

いっぽう、伝統主義的な知識層は古典語に固執して、話し言葉に背をむけた。その結果、もともと修辭的性格のつよいこの言葉が、彼らにおいていわば自己目的と化し、コミュニケーションの手段という役割からますます遠のいていったという事情もある。こうした種々の事実がこども、書き言葉としてのアラビア語の威信を失墜させる結果をもたらしたのであった。

もちろん、独立後はアラビア語教育が復活し、これに非常な努力がはらわれている。初等教育で週に十時間、中等教育で四ないし八時間、メデルサ(medersa)と呼ばれる宗教学校ではじつに二十三時間ものアラビア語を課し、歴史の授業はアラビア語でおこなうことを義務づけているが、まだ大部分のアルジェリア人には国歌さえまともに理解できないのが実状であり、したがってフランス語の使用はいぜんとして存続し、たとえば新聞についてみても、日刊、週刊あわせて十一紙のうち、アラビア語の新聞は日刊、週刊それぞれ一紙ずつにすぎないという。⁽⁴⁾

- (1) Mostefa Lacheraf : *L'Algérie : nation et société* (Maspero, 1969), p. 313.
- (2) *ibid.*, pp. 316-317.
- (3) *ibid.*, p. 329. またバーナード・ルイス『アラブの歴史』(みすず書房)、一三〇—一三二ページ。
- (4) Ch.-Robert Ageron : *Histoire de l'Algérie contemporaine* (P. U. F., 1970), pp. 123-124.

アルベール・メンシのいう「言語のドラマ」(drame linguistique)が演じられるのは、まさにこうした背景においてである。メンシの『植民者の肖像と被植民者の肖像』(*Portrait du colonisé, précédé du Portrait du colonisateur*)は、フランツ・ファノンにさきがけて植民地の社会的・心理的メカニズムにメスをくわえ、植民地主義を

するどく告発した注目すべき著作⁽¹⁾だが、このなかでメンミは、「植民地のドラマ」(drame colonial)の一環としての「言語のドラマ」について述べている。⁽²⁾これは「北アフリカ派」の作家たちの言語論を代表するものと思われるので、以下ややくわしくその紹介をしておきたい。

メンミによれば、植民地における二言語使用 (bilinguisme) は、被植民者が運命づけられた本質的二重性の象徴にほかならない。文盲状態から脱しようとすれば、被植民者は必然的に、植民者の言語と母国語との併用をしいられる。なぜなら、彼の母国語は書かれも読まれもないのだから。民族の言語にみがきをかけ、これを過去の栄光のままに保持しようとつとめる知識人のグループもあるが、この言語の微妙な形態はすでにひさしく日常生活との接触をうしない、一般民衆には理解困難なものとなってしまった。行政、司法、技術など社会のあらゆる領域で植民者の言語しかつかわれず、自国語しか知らぬ被植民者は「自国における異邦人」である以上、コミュニケーション、文化、進歩などの条件として二言語使用は不可避である。

しかし、文盲状態という「終身禁固」をまぬがれた二言語使用者を待っているのは、「けっして完全には克服されない文化的破局」だ。母国語と文化語との不一致そのものは、かならずしも被植民者に固有のものではないが、植民地での二言語使用は他のいかなるそれとも異質だからである。「二言語を所有するとは、たんに二つの道具を所有することではない。それは二つの精神的・文化的王国に参加することなのだ。ところで、ここでは、二つの言語によって象徴され、ささえられている二つの世界は、葛藤状態にある。それは植民者と被植民者の世界なのだ。」

のみならず、被植民者の感覚や情念や夢によって培われている彼の母国語は、「はずかしめられた言語、うちくたかれた言語」である。そこで彼は、職につき地位を得るために、すすんで母国語から遠ざかり、植民者の言語しかつかわぬようになる。「要するに、植民地における二言語使用は、ともに同一の感情世界にぞくする民衆の方言と言語^{ピュ}

純化論者の言葉が共存しているような二言語使用ではないし、また、たんなる多言語使用による豊かさ〔……〕といったものでもない。それは言語のドラマなのだ。」

抑制のきいた冷静な言葉で語られてはいるが、ここには、母国語を収奪され、征服者の言語によってしか表現活動のできぬ被植民者作家の屈辱と苦痛が、ありありと感じとれる。この屈辱と苦痛は、おそらく「北アフリカ派」の作家たちすべてのものであったにちがいない。

ところで、フランツ・ファノンもいうように⁽²⁾、ある言語を話すとは、ひとつの文化をひきうけることである。被植民者は植民者の言語を話すことによって、好むと好まざるとにかかわらず、植民者の文化をひきうけなければならぬ。ここでわれわれは同化の問題にみちびかれる。

(1) この本の初版が一九五七年に Buchet, Chastel-Corréa 社から出たとき、フランツ・ファノンはまだ処女作『黒い皮膚・白い仮面』しか発表していなかった。なお、この本は渡辺淳氏により『植民地——その心理的風土』と題して訳出されているが(三一書房)、現在は絶版になっていて参照することができなかった。ついでながら、ファノンとメンミの関係については、メンミがファノンの革命的ロマンチズムや民族ブルジョワジー非難などを批判した興味ぶかい文章がある (Albert Memmi : L'homme dominé, Gallimard, 1968, pp. 63-67)。

(2) A.Memmi, op. cit. (J.-J. Pauvert, 1966), pp. 143-145.

(3) 『黒い皮膚・白い仮面』(みすず書房刊、フランツ・ファノン著作集1)、二五ページ。

2 同化の挫折

「北アフリカ派」の作品には、混血結婚をテーマにしたものが少なくない。けだし、同化がかりに可能であると考えれば、混血結婚こそそのもっとも有効な手段だからであろう。しかし、私のみたかぎり、幸福な混血結婚を描いたケ

ースは皆無といってよく、このことは、同化への道がいかにけわしいものであるかを如実にしめしている。被植民者にとって、はたして同化は可能なのであろうか。以下、いくつかの作品をめぐって、この問題を考えてみたい。

まず、ムールード・フェラウンの二部作、『土と血』(La terre et le sang, 1954. ポピュリスト賞受賞)と『上り坂』(Les chemins qui montent, 1957) をとりあげよう。

フェラウンは一九一三年、アルジェリアはカビリア地方の農村に生まれた。農民 (fellah) であった父親は、フランスへ出稼ぎに行った経験をもっていた。フェラウンは貧しいながら優秀な生徒として少年時代を送ったのち(彼の処女作『貧者の息子』(Le fils du pauvre, 1950) はこのころの生活を描いた自伝小説である)、アルジェ師範学校を出て教師として働くかたわら、文筆活動にたずさわったが、一九六二年三月、祖国解放を目前にしてOASの手で殺された。

さて、『土と血』の物語は、主人公アメルが妻のフランス女性マリーをともなって、故郷カビリアに帰ってきたところからはじまる。アメルは一九一〇年にフランスへわたり、叔父ラバーの保護のもとに北部の鉦山で働いていたが、ここで、この物語の悲劇の遠因になる事件がおこる。鉦夫仲間のポーランド人アンドレが、妻をラバーに寝とられた嫉妬から、アメルをつかい事故死とみせかけて、作業場でラバーを殺害したのだ。アメルの同胞たちは、彼に証言させてアンドレを訴えようと考えたものの、当局がアラブ人の証言などとりあげるはずはないと判断、けっきょく泣き寝入りしてしまう。帰国したアメルを待ちうけていたのは、彼を兄の殺害者だと信じこんでいるスリマーヌの憎悪だ。あまつさえ、スリマーヌの二十も年下の妻シャバーとアメルのあいだに恋が生じ、物語はいつきに破局へとつきすすむわけだが、以上のあらすじからもわかるように、ここでは、悲劇の原因は混血結婚そのものにはない。従順なマリーは夫の国の生活に同化しようと努力し、じじつ、ほぼそれに成功しているからだ。混血結婚に起因する悲劇

が描かれるのは、つぎの『上り坂』においてである。

やはりアメルという名前をもつ『上り坂』の主人公は、さきほどのアメルとマリーのあいだに生まれた混血児である。四年間のフランス滞在をおえて帰国したアメル青年は、いとこにあたる父なし子、キリスト教に改宗したデビアという娘に恋する。デビアもアメルに心をよせているが、ある日、アメルの幼友たちであるモクラーヌに犯される。モクラーヌにはすでにウイザという妻があったのだが、このウイザとアメルの関係を邪推したモクラーヌは、嫉妬と憎悪にかられて、ついにアメルを殺害する。

この小説はしかし、たんなる愛憎のドラマにとどまらない。小説の第二部を構成するアメルの日記は、「半フランス人」(semi-Français)としての彼の分裂と苦悩の記録なのだ。ものごころついたころから「マダムの子」とか「イヌの子」と呼ばれ、よそ者あつかいされながら育ったアメルは、周囲の回教社会にたいして違和感をいだいて深めていく。彼にたいするモクラーヌの憎悪も、たんに恋がたきとしてばかりではない。狂信的な回教徒モクラーヌにとつて、アメルは憎むべき異教徒にはかならないのだ。「落伍したコミニスト」と自称するように、アメルはキリスト教徒ではないのだが、狂信者モクラーヌにとつては、コミニストはキリスト教徒なのである。政治運動が弾圧されたのを機に、アメルは母の身寄りをつたよってフランスへわたるが、そこでも彼はしよせん異邦人にすぎなかった。彼に投げかけられる言葉はいつもきまつて「きさまの国へ行け、このアラブ野郎 (Bicot) !」なのだ。しかし、はたして彼に祖国があるのだろうか。帰国の船上でアルジェの港がみえてきたとき、彼があるフランス人にむかって「きれいですね」と話しかけると、彼がアラブ人だと気づかぬそのフランス人は、「しかし、アラブ人が多いのは困ったことですね」と答えるのである。「われわれの国はだれのものなのか。いずれにしても、そこで飢えに苦しんでいる人たちのものではない」とアメルは日記に書く。彼の死は結果的には他殺にちがいないが、以上のような疎外感ゆえに、み

ずからもすでに死を決意していたのだった。

(1) M. Feraoun: *Les chemins qui montent* (Seuil, 1957), p. 209.

アルベール・メンミの『アガール』(Agar, 1955)も、混血結婚の挫折をテーマにした小説である。作者と同じくユダヤ系チュニジア人である主人公は、医学の勉強のためパリに滞在中、アルザス出身のカトリック教徒の女子学生、マリー・ミュレールと知りあって結婚し、チュニスで生活することになるが、マリーはこの国の食物や習慣になじまず、はやくも夫婦のあいだに小さな亀裂が生ずる。やがて男児が生まれるが、ユダヤの習慣にもとづく命名法や割礼の問題をめぐって溝はますます深まり、ついに離別の時がおとずれる。

「『アガール』は混血結婚についての研究ではなく、二人の人間の物語である」という作者の言葉にもかかわらず、この作品にはいささか問題小説的な底の浅さも感じられなくはない。その点、処女作『塩の彫像』(La statue de sel, 1953)は、混血結婚こそあつかっていないが、同化志向とその挫折を、はるかに深くとらえている。のちに作者自身が、「ある意味で、その後の私のすべての仕事は、この処女作においても多少とも意識的に提起された種々の問題に答えるための、多岐にわたる多様な努力である」と書いているように、ここにはメンミのすべてがあるといえる。カミュの序文のついたこの『塩の彫像』は、その意味でメンミの代表作であるのはもちろん、「北アフリカ派」の作品のなかでも、おそらく最良のもののひとつにかぞえられよう。この小説は自伝の形式をとっており、じじつ、メンミ自身の証言に照らしてみても、⁽³⁾これが、チュジニア生まれ(一九二〇年)のユダヤ人である作者の人間形成をほぼ忠実にたどったものであることは明らかである。

『塩の彫像』の主人公は、ユダヤ人の馬具製造職人とベルベル系女性とのあいだに生まれ、ユダヤ教的環境のなか

で育ったが、幼少期からユダヤ系アリアンス時代までの、周囲との違和感のない幸福な生活は、フランス系リセに入学するにおよんで、たちまちくずれさる。その第一撃は、アレクサンドル・モルデカイ・ブニルシュ (Alexandre Mordekhai Benilouche) という彼の名前にたいする級友たちの嘲笑であった。アレクサンドルは、ヨーロッパの威信にたいする尊敬からつけられた名前であり、モデルカイはユダヤ的伝統への帰属をあらわし、ベルベルアラブ方言で「小羊の子」を意味するブニルシュは、彼の家系の土着性をしめしている。しかし、「たとえ私がベルベルの部族の出であっても、ベルベル人は私を認めてはくれまい。なぜなら、私はユダヤ人であって回教徒ではなく、都市の住民であって山地の住民ではないのだから。また、たとえ私が「アレクサンドルというイタリアの」画家とまったく同じ名前をもっているとしても、イタリア人は私を歓迎してくれまい。なぜなら、私はアフリカ人であってヨーロッパ人ではないのだから。私はこれからもずっと、植民地化された国における土着民、反ユダヤ主義的世界におけるユダヤ人、ヨーロッパが勝ち誇っている世界におけるアフリカ人〔……〕たる自分を見出すだろう。」⁽⁴⁾

出生そのものによって運命づけられたこの西洋対オリエントの葛藤のなかで、やがて選択をせまられた主人公は、西洋をえらんでオリエントと訣別するのだが、その彼を待ちうけていたのは、二度にわたる西洋の裏切りであった。その第一はヴィシー政府によるユダヤ人弾圧であり、第二は、やはりユダヤ人であることを理由に、自由フランス軍への参加を拒否されたことである。「最初の場合はまだ相手に弁解の余地を認めることができた。ヴィシー政府にたいしては、西洋自身が異議をとんでいたのだから。だが、こんどこそもう疑いの余地はなかった。〔……〕私はオリエントを拒否したが、西洋は私を拒否したのである。」⁽⁵⁾ 東西両世界からしめだされてデラシネとなった主人公は、創世記の故事にあるように、ふりむいて塩の彫像に化せられることを恐れて、大学進学を断念し、未知の国アルゼンチンへと脱出する。⁽⁶⁾

- (1) A. Memmi : Préface à l'édition 1963 d'Agar (Bachelot-Chastel), p. 5.
- (2) A. Memmi : L'homme dominé, p. 100.
- (3) A. Memmi : Portrait d'un Juif (Gallimard, 1962), pp. 11-15 を参照。
- (4) A. Memmi : La statue de sel (Gallimard, 1966), p. 89.
- (5) *ibid.*, pp. 272-273.
- (6) この結末はむろんフィクションで、メンミ自身はアルジェとパリで高等教育をうけ、リセ・ド・チュニスの哲学教授をつとめたのち、現在はソルボンヌのエコール・プラチック・デ・オート・ゼチュールドで社会精神病理学の教鞭をとるかたわら、植民地主義を告発し、抑圧からの解放をめざす著作活動を精力的にすすめている。最近のめざましいマグレブ文学の発掘・紹介も、彼の努力によるところが大きい。

さて、自己否定と他者（＝植民者）への愛からなる被植民者の同化志向が、まさに植民者の拒否によって挫折せざるをえないとすれば、つぎに被植民者のとりうる姿勢は反抗であろう。この反抗のすがたを描いた代表的な作品に、ドリス・クライビの『山羊たち』(Les boucs, 1955) がある。主人公ヤラン・ヴァルディクは同化を夢みてカビリアからフランスへやってくるが、その夢の破れた彼を待ちうけているのは失業と飢えである。彼はシモーヌというフランス女性と同棲しているが、二人を結びつけているのは愛ではなく、「憎悪のきずな」にほかならない。彼が接近する同胞の失業者の群れ、「山羊たち」は、盗みや殺しをはたらく無法者であるが、ヴァルディクにとっては彼らだけが、「フランス在任の三十万の北アフリカ人のうち、自己の悲惨を短刀としてつかう〔……〕チャンスを理解した」⁽¹⁾人間たちなのだ。

ここには、左翼知識人（メンミのいう「善意の植民者」）をもふくめた全ヨーロッパ世界にたいする告発と、反抗への呼びかけが、それにふさわしい荒あらしい文体で語られており、その意味で、A・カティビがこの小説を「フランツ・ファノンの暴力論の文学版」⁽²⁾と評しているのもうなずける。

しかし、反抗が「山羊たち」のような反抗にとどまっているかぎり、被植民者の真の解放はありえないだろう。この目的のためには、メンシがいうように「反抗の克服、すなわち革命」⁽³⁾が必要であり、この革命が全面的な非植民地化であることはいうまでもあるまい。そこで次章では、被植民者におけるそうした自己肯定の側面を、ナショナリズムとの関連においてさぐってみたい。

(1) Driss Chraïbi : *Les boucs* (Denoël, 1955), p. 190.

(2) Abderkabir Khatibi : *Le roman maghrébin* (Maspero, 1963), p. 71.

(3) A. Memmi : *Portrait du colonisé*, p. 182.

3 祖国をもとめて

「北アフリカ派」のなかでナショナルなものへの志向が顕著な小説家としては、モハメド・ディブとカテブ・ヤシームがあげられよう。二人がいずれもアルジェリア出身であるのは偶然ではない。⁽¹⁾ まえにもふれたように、アルジェリアでは、チュニジアやモロッコにくらべて植民地的抑圧がはるかに苛酷なものであっただけに、アブデル・カーデル (Abd el-Kader) の時代以来、ナショナリズムの動きもまた活発だったからである。M・ラシュラフはアルジェリア・ナショナリズムの特性について、こう書いている。——「エジプト、シリア、チュニジア、モロッコでは、ナショナリズムは社会の保証、保全として生まれた。というのは、これらの国には民族の主権ないし半主権が存在していたからである。ブルジョワ階級のレベルにあったこのナショナリズムは、おそらく不完全ではあっても破壊されてはいない一社会の表現であった。アルジェリアでは、社会は民族以上に致命的な打撃をこうむったのだが、〔……〕にもかかわらず、至高の目的、専一の賭金となったのは後者のほうなのだ。これはまさに、こちらの精神的総体、回

復への秘密の貯えをつかんでいなかったために民族を否定した敵側の態度によって、間接的にきめられた一種の賭けであり、挑戦であった。⁽²⁾」

現代のアルジェリア・ナショナリズムは、一九二六年にパリで「北アフリカの星」(Etoile Nord-africaine) が結成されたことにはじまる。これは当初コミュニストの組織として出発したが、翌年には穏健派メッサリ・ハジ(Messali Hadj)の指導下にはいり、これが発展して一九三七年、アルジェリア人民党(Parti du Peuple algérien)の結成をみた。このPPAは、一九三五年に結成されたアルジェリア共産党がやがて解体したという事情もあって、プロレタリアートから小市民や知識層までの幅広い支持をあつめて活躍した。このほかの民族主義政党としては、アラブ・ルネサンスをめざす回教政党、ウラマ協会(Ulama)や、フェルハト・アバス(Ferhat Abbas)を指導者とするブルジョワ民族主義政党、アルジェリア宣言民主連合(Union démocratique du Manifeste algérien)などがあった。

第二次大戦後、PPAの指導者メッサリ・ハジは民主的自由獲得運動(Mouvement pour le Triomphe des Libertés démocratiques)を組織するが、このMTLDは一九五四年にメッサリ派、中央派、セントラルリスト統一行動革命委員会(Comité révolutionnaire d'Unité et d'Action)派に分裂、やがてこの最後のCRUAを中心に幅広いFLNが結成されることになる。UDMAもこれにくわわったが、メッサリ派のアルジェリア民族運動(Mouvement national algérien)のみはついに不参加のままだった。⁽³⁾

(1) フェラウンは、アルジェリアでもカビリア地方の出身である。フランスは分割統治策によって、カビリア高地に住むベルベル人の同化につとめ、これを他のアルジェリア人と反目させた。

(2) M. Lacheraf, op. cit., p. 323.

(3) アルジェリア・ナショナリズムについては M. Lacheraf, op. cit., pp. 157-201 及び Ch.-Robert Ageron, op. cit., pp. 87-98 を参照。

さて、モハメド・ディブは一九二〇年、アルジェリア西部のトレムセンに生まれ、ここで中等教育をおえると、各種の職業を転々としたのち、ジャン・ケロールのすすめで文学をはじめたという経歴の持主だが、『長屋』(La grande maison, 1952)、『火事』(L'incendie, 1954)、『織機』(Le métier à tisser, 1957) からなる彼の初期の三部作『アルジェリア』は、トレムセンとその近郊の農村を舞台に、第二次大戦前後を時代背景として、貧しい民衆の生活と、その緩慢ながら確実な民族意識のめざめを描いている。

小学校で、「祖国とは何か」という先生の問いにたいする級友の「フランスがわれわれの母なる祖国です」という答えに、どうしても納得のいかなかった主人公オマル少年は、日々の糧にもこと欠く自分たちの貧困、町にあふれる失業者の群れ、隣人の民族主義者の逮捕、コマンドールと綽名される老人から聞く祖国の過去の栄光と現在の悲惨、コロンのもとで働く農業労働者たちのストライキとそれにたいする苛酷な弾圧、織物工場でのいろんなタイプの労働者との接触、ヨーロッパ人からうける屈辱——こうしたさまざまの経験をかさねながら、自分のおかれた植民地状況にしないで目をひらかれていく。

「アルジェリア文学のバルザック」⁽¹⁾と評されるように、この三部作におけるディブの手法は伝統的なリアリズムにとどまっているが⁽²⁾、一種独自の象徴的手法と、大胆で破格の文体によって、民族の問題に高度の文学的表現をあたえた作家に、カテブ・ヤシーヌがいる。

ヤシーヌは一九二九年、弁護士の子として、コンスタンチヌ県のコンデ・スマンドゥーに生まれた。回教系小学校からフランス系小学校に移り、フランス語の学習にはげんだが、コレージュ・ド・セティフに在学中、のちの民族

解放闘争の烽火ともいふべき「コンスタンチヌの暴動」がおこった。これは、民族主義運動の指導者メッサリ・ハジの追放を機に、一九四五年五月八日から十三日にかけて、コンスタンチヌ県のセティフとゲルマで組織された武装蜂起で、約五万人の民衆がこれに参加、ヨーロッパ人二百余名を殺傷した。これにたいする当局の弾圧は苛酷をきわめ、数千人にのぼる死者が出たという⁽³⁾。十六歳の学生だったヤシーヌも五月八日のデモに参加して投獄され、そのショックで彼の母は不幸にも発狂した。この事件がいわば原体験として、彼の全創作活動をささえることになる。

ヤシーヌの代表作である『ネジュマ』(Nedjma, 1956) は、象徴主義的ともいえる特異な手法で祖国探求を描いた小説である。ラシド、ラクーダル、ムーラド、ムスタファという四人の青年は、いずれも五月八日のデモに参加して投獄され、ために学校を追われて、いまはコロンのもとで採石場の人夫として働きながら、ネジュマという神秘的な女性への愛にとりつかれている。ネジュマはカメルという男の妻なのだが、彼女の出生は秘密のヴェールにつつまれており、そのことがますます四人の青年をネジュマにひきつけてはなさない。彼らはそれぞれこの秘密のなかに、自分をネジュマとつなぐ血のきずなを見出そうとする。

物語の進行につれてしだいに明らかになってくるネジュマの出生の秘密とは、およそつぎのようなものであった。ムーラドとラクーダルの父シディ・アーメドは、マルセーユの公証人の妻であるフランス女性を情婦にしていたが、このフランス女性がある夜、シ・モクタールという女たらしとラシドの父とによって、洞窟のなかに連れこまれる。翌朝、この洞窟のそばにラシドの父の死体が発見された。つまり、シ・モクタールはラシドの父を殺してフランス女性と関係し、このときネジュマがはらまれたのである。

この秘密は、メッカ巡礼の帰途、シ・モクタールの口からラシドに明かされるのだが、このときシ・モクタールは同時に、彼らの共通の先祖についても語った。それによると、彼らの先祖であるケブルートの部族は、かつて中東か

ら出てアルジェリアに達し、ゲルマ東部のナドール山に住みついた。古くはニューミディアの民として侵略者ローマ人に抵抗し、アラブ人やトルコ人にも屈しなかったこの誇り高き部族は、あらたな征服者フランス人にも服従せず、ために迫害されて四散せざるをえなくなるが（この離郷者たちの子孫がシ・モクタール、シディ・アーメド、ランドの父らである）、このとき故郷にふみとどまった人たちの子孫は、いまなおナドール山で復讐の機をうかがっている。

シ・モクタールはランドにいう。——「おまえは、われわれの先祖の地たるこの国、フランスの一地方ではなく、また総督もサルタンもないこの国の運命に思いをいたすべきだ。おまえの頭にあるのはおそらく、たえず侵略ばかりされてきたアルジェリア、その錯綜した過去のことだろう。というのも、われわれは民族 (une nation) じゃないのだからね、まだ。このことは知っておくがいい、われわれは間引きされたばらばらの部族 (des tribus décimées) にすぎないのだ。われわれの部族をうやまうことは、あともどりすることじゃない。この部族こそ、われわれを結びつけ、われわれを再発見するためにのこされた唯一のきずなのだ。」⁽⁴⁾

シ・モクタールはランドに助けられてネジュマをナドール山へみちびき、その部族の手に返すが、彼自身は部族の裏切者として殺される。以後ランドは、かつてニューミディア王ジュグルタがはたすことのできなかった祖国再建の夢を自分の夢とするにいたるが、本来の運命にゆだねられてとらえがたい存在となってしまうたネジュマに象徴されるように、あたらしい祖国はまだ明確なすがたをあらわさない。

ムーラドのコロン殺害事件によって他の三人も逃走するが、彼らが逃げながら、また逮捕されたものは獄中で、それぞれネジュマにいだきつづける思慕は、そのまま、他民族のあいつぐ侵略によってうしなわれた祖国への憧憬であり、また、生まれ出るべきあたらしい国への模索だといえよう。

民族解放戦争そのものは、『ネジュマ』ではまだ描かれていないが、劇作『報復の環』(Le cercle des représailles,

1959) になると、それが前面に出てくる。これは、『包囲された屍』(Le cadavre encerclé) と『先祖は残忍さをくわえる』(Les ancêtres redoublent de férocité) の二つの悲劇、ファルス『知恵の粉』(La poudre d'intelligence)、および劇詩『禿鷹』(Le vautour) の四篇が、それぞれ相対的に独立しながら、全体として統一された世界を構成している作品であるが、五月八日のデモ、牢獄、ネジュマ、ケブルートの部族、復讐する先祖といったテーマは、『ネジュマ』と共通している。ここではネジュマは虐殺されたラクードルの恋人だが、やがて「野生の女」へと変身をとげ、先祖の使者たる「禿鷹」とともに、コーラスであらわされる民衆を戦いへと鼓舞するのだ。

カテブ・ヤシーヌは民族の過去と現在、伝説と歴史を、グリサンのいう「詩的レアリズム」⁽⁵⁾ の手法で渾然と融合させ、ひとつの象徴的世界を構築することによって、民族の集団意識を形象化するのに成功している。しばしばフォークナー、ジョイス、カフカなどに比較される彼の小説技法や、ランボーに比較される詩的言語について、ここで立ちいった考察をする余裕はないが、彼が現代フランス文学のなかに掛値のない市民権を獲得しえた理由のひとつが、技法革新という現代文学の課題にたいする彼の意欲的な姿勢にあることはたしかであろう。

- (1) A. Khatibi, op. cit., p. 56.
- (2) もっとも、デュブの手法は『アフリカの夏』(Un été africain, 1959) あたりから変化をみせはじめる。アルジェリア戦争を描いた『海を忘れたら』(Qui se souvient de la mer, 1962) や、最新作『荒れた岸を走れ』(Cours sur la rive sauvage, 1964) は、全巻イメージとシンボルで構成された、SFを思わせるような作品である。
- (3) Ch.-Robert Ageron, op. cit., pp. 93-94.
- (4) Kateb Yacine : Nedjma (Seuil, 1956), p. 128.
- (5) K. Yacine : Le cercle des représentées (Seuil, 1959) < Edouard Glissant の序文、一〇ページ。
- (6) ヤシーヌは「北アフリカ派」の作家中、たとえ『Dictionnaire de littérature contemporaine』(Ed. Universitaires, 1963) に出づる唯一の作家である。

結びにかえて

ところで、アルジェリアの作家ヤシーヌがフランス文学のなかに位置を占めるとは、いったいどういうことなのか。あるいは、もっと一般的に、そもそも「北アフリカ派」の文学はフランス文学なのかマグレブ文学なのか。——こういうことは、おそらく独立以前には問題とはならなかったであろう。なぜなら、「北アフリカ派」の作家たちが、すくなくとも祖国の独立をねがう真正な被植民者であるかぎり、フランス文学への同化を志向するはずはなかったからである。彼らがフランス語を使用したのは、まえに述べたような言語状況にあって、それが唯一の可能な表現手段だったからにほかならない。だが、新植民地主義という問題はあるにせよ、すくなくとも政治的には独立が達成されたときから事情は一変したはずではなかったのか。

かつてメンミは、「ヨーロッパ語による被植民者の文学は夭死する運命にあるように思われる」と書いた⁽¹⁾。これはもちろん、非植民地化後の母国語による文学の出現を予想しての言葉だが、そのメンミ自身、ディブやヤシーヌらとともに、いまなおフランス語で書きつづけているのはなぜか（もっともメンミの場合は、ユダヤ人であることを理由に新国家からも疎外されたという事情がある⁽²⁾）。

ひとつには、まえにもみたように、新国家における母国語の教育がまだ十分な成果をあげていないという外的条件があるが、より重要なのは、「われわれには、たしかにもうおそすぎるのだ⁽³⁾」というマレク・ハダッドの言葉に示めされている作家主体のがわの問題であろう。ここには、在日朝鮮人作家、金達寿が「かつて——いまもお少しそうですが——私はこの不平等のゆえに、この日本語をこんなに「上手」におほえることができました⁽⁴⁾」と述べたのと同じ事情——母国語以上に支配者の言語に習熟した、いや習熟させられた植民地作家の悲劇がある。われわれとして

は、なによりもまず、植民地支配がもたらしたこの消えさらぬ傷痕に思いをいたすべきであろう。このことをぬきにして、たとえば、「北アフリカ派」はフランス文学かマグレブ文学かといった議論をしてみても、しょせん不毛なせんさくにおわるのではあるまいか。

- (1) A. Memmi : *Portrait du colonisé*, p. 148.
- (2) この点については A. Memmi : *Portrait d'un Juif*, p. 14 を参照。
- (3) *Anthologie des écrivains maghrébins d'expression française*, p. 151.
- (4) 尾崎秀樹、前掲書、五―六ページからの孫引。

〔付記〕 本稿は、昭和四四、四五年度の同志社大学人文科学研究助成金による共同研究、「民族と文学——二十世紀の含む諸問題」における分担課題（「北アフリカ派」の作家たち）についての研究成果の一部である。